

# 猪苗代湖北岸鳥類調査報告

2020年（令和02年）実施



猪苗代湖北岸 飛来したマガン

2021年2月28日  
日本野鳥の会会津支部

## “The Report of monitoring birds at the northern shore of lake- Inawashiro in 2020”

Katsuyuki Hayashi, Syohji Koyama, Ken Takeda, Shinya Mitsuta

Chikako Yamagishi, Jun Hoshino

Wild Bird Society of Japan, Aizu-branch      Aizuwakamatsu city, Fukushima, Japan

### Abstract:

We conducted a survey of birds using line census method at the northern shore of Lake-inawashiro from 2012 to 2020. From Results of the survey, 66 species of Birds that contain of 70% water-birds in this area was identified at 2020 and recorded 108 species of Birds for the period of 9 years. 26 species of Rare species of Red-List at Fukushima were identified. Dominants species in breeding season were Spot-billed Duck and Oriental Great Reed Warbler that were stable for their population status. But the population of the latter and Skylark are on the decrease for the period. We presumed environmental change of their niches. The promotion of Scientific works on Birds are required to establish a protection management system at Lake-inawashiro. Recognizing the Ramsar Convention is one of important subject for us.

Key Words : “Reedy shore, Water-environment, Great reed warbler, Black-browed reed warbler, Skylark, Chinese little bittern, Ducks, Ramsar Convention “

# 猪苗代湖北岸鳥類調査報告 2020年（令和02年）

The Report of monitoring birds at the northern shore of lake-Inawashiro in 2020

Katsuyuki Hayashi, Syohji Koyama, Ken Takeda, Shinya Mitsuta

Chikako Yamagishi, Jun Hoshino

Wild Bird Society of Japan, Aizu-branch Aizuwakamatsu city, Fukushima Japan

**Abstract:** 猪苗代湖北岸域に生息する鳥類の調査を2012年から継続し2020年データ9年になる。湖北岸の農耕地と水辺環境は、生息する鳥類の種類が多く、今年の調査で66種となり、水辺に生息する種が70%以上占め、9年間で108種観察し、調査前の95種より多く、希少種は26種となり、多くの鳥類が生息し、多様性のある環境を確認した。繁殖期はオオヨシキリとカルガモが優占種で、この期間生息数は安定している。しかしヨシ原のオオヨシキリや草原の鳥ヒバリの生息数は、漸減傾向にあり、水生植物の増加や農耕地の変化等の生息環境変化も要因と推測される。水環境や鳥類生息環境の保全のため、ヨシ原と水生植物の適切な管理が求められ、多くの人々による継続的な保全と教育活動目標としてラムサール条約への登録も課題となっている。

**Key words:** ヨシ原 水環境 オオヨシキリ コヨシキリ ヒバリ ヨシゴイ カモ類 ラムサール条約

## 1. 調査の目的

猪苗代湖北岸の鳥類の調査は、継続的な記録を目的の一つとして、平成23年から開始し、本年令和02年で9年になる。この間に東日本大震災があり、浜通り地域の生息鳥類への影響が報告されたりしている。気候等自然環境の変化がある中、会津地域の鳥類の種類や数の変化にも注目される。従来からこの猪苗代湖地区の鳥類の調査記録は少なく、鳥類相の年間の変化が不明であった。継続的な調査で、鳥類相を明らかにすることを目的とし、その推移についても考えてみる。猪苗代湖は福島県の中央部に位置し、全国で3番目の面積(103.3km<sup>2</sup>)を持つ淡水湖で、標高は514mと高地にあり、最高水深93.5m 平均水深51.5mと比較的深く、冬期でも全面氷結し難い湖でもある。湖の北に磐梯山や猫魔ヶ岳が聳え、磐梯高原やその湖沼群は、自然景観に優れ、猪苗代湖を含めて磐梯朝日国立公園として、1950年に指定され70余年の歴史がある。例年多くの人が訪れ、観光が地元産業のひとつとなっている。この美しい自然環境に親しめるように、公園には、遊歩道とサイクリング道が整備されている。2016年に福島県の猪苗代水環境センターが、水質調査保全教育活動の施設として設置された。北岸部は、水辺にヨシ原が帯状に広がり、陸側に柳やハンノキの樹林帯と畑や水田の農耕地が広がる。東側に小黒川、西側に高橋川の河川と農耕地を区切るように農業用水路が湖に注ぎ、湖岸から約150~500m幅の農耕地を国道49号線が横断している。北岸は遠浅で、貴重なミズスギゴケなどの他にヒシやヨシ等の抽水性水草が育つ自然環境となっている。鳥類の生息環境として、湖と流入河川の水辺をヨシ原と樹林相が囲み、その外に農耕地が広がり、長さは約5kmあり、生息種数の多いことから、多様性のある生息環境と言われている。このような自然環境を人々の活動を考慮しながら保全し、将来に残すことが大切である。鳥類等の観察を通して、北岸の自然環境を知り、環境の保全と人との共生を考えて行くことも重要である。鳥類の調査は、福島県が平成15年に北岸地域について実施しているが、継続調査の記録は無く、且つ現在の状況も良く分からない。近年湖水の水質低下、特にpHとCODの数値の上昇が心配され、湖沼水質の全国ランクが降下した。このため、関係機関や地域の住民を中心とした協議会が主体で、ヨシの刈り払い、水草のヒシの採取や漂着水草の回収、ゴミ清掃など水質保全の施策に多くの人が毎年取組んでいる。今回の調査は、平成23年度から開始したもので、環境変化として水田の一部畑地化がこの間にあった。平成29年の高橋川河口周辺の樹木伐採があり、平成31年は、機械舟でのヒシ刈り及び白鳥浜でのヨシ刈りが昨年に続き実施され、景観改善の目的で国道からの湖の見通しを得るために白鳥浜のヨシ原の一部刈り実施した。

令和02年は烏帽子浜と三城潟のヨシ原の一部と散在していた低木も10月に刈り払われた。機械船での除去作業の他に手作業でのヒシ除去は、例年通り実施された。今年度は昨年度同様に新型コロナウイルス感染防止のためにヒシ除去、水草回収などの活動が制限された。

## 2. 調査の方法

調査を始めてから基本的に同じ方法で実施。猪苗代湖北岸地域に7つの観察定点を設定し、約10分間のスポットセンサス法で定点間の移動時もラインセンサス法で、出現鳥類の種類と羽数を記録する。設定した定点は従来と同じ処であり、湖上等を遠くまで視認できる場合は、約50mまでとし、普通は25m程度で、双眼鏡と望遠鏡で確認した。調査時間は、鳥類が活発に活動する午前中（7:00～11:00）を原則とし実施した。観察頻度は、月に1回としたが、繁殖時は2回程度とした。基本的には、今までの方法と同様である。ヨシキリ類やヒバリについては、観察した地点を記録用地図上に記し、分布調査の資料とした。

表1 調査地点の概要

地点	地形	植生
P1	松橋浜 平地 明るい見通し良。入り江状	岸边は砂地、ヨシ原、フトイあり。低木相多い。
P2	白鳥が浜 平地段丘あり。明るく見通し良。	牛沼川両岸にヨシ原。東に島状ヨシ原。高木少。
Pe	小黒川口 平地 河口 遠浅で見通し良。	河口の西に樹林帯とヨシ原広がる。
P3	烏帽子浜 平地 明るい。樹林で見通し不良	小黒川と烏帽子浜間にヨシ原。河口にアサザ。
P4	三城潟 平地 見通しは不良。	ヤナギなどの樹林相とヨシ原あり。
P5	高橋川口 平地 入江状 湖側に島がある。	亜高木層の樹林相あり。ヨシ原少なし。砂浜
P6	蟹沢浜 平地 岸边は砂岩地キャンプ場	樹林相は少ない。ヨシ原少なし。砂浜あり。

鳥類の生息環境は、水辺と山野に分けられ、生息する種の違いが見られる。今回の調査地点をヨシ原や樹林と農耕地などから、水辺環境優占地点 P1,P2,Pe,P5,P6 山野環境優占地点 P3,P4 とした。樹林帯があると、湖方向への見通しが失われ、ヨシ原はこの樹林帯と湖岸の間を埋めるように広がっている。地点 P2,Pe,P3,P4 は遊歩道沿いに、P1,P5,P6 は互いに孤立した位置となっている。北岸部のヨシ原の刈り取りは、H23 から実施し、H26 を除き毎年一定面積で実施されている。



写真1 P1 松橋浜



写真2 P1 松橋浜



写真3 P2 白鳥浜



写真4 P2 白鳥浜



写真5 Pe 小黒川



写真6 Pe 小黒川



写真7 P3 烏帽子浜



写真8 P3 烏帽子浜



写真9 P4 三城潟



写真10 P5 高橋川口



写真11 P5 高橋川口



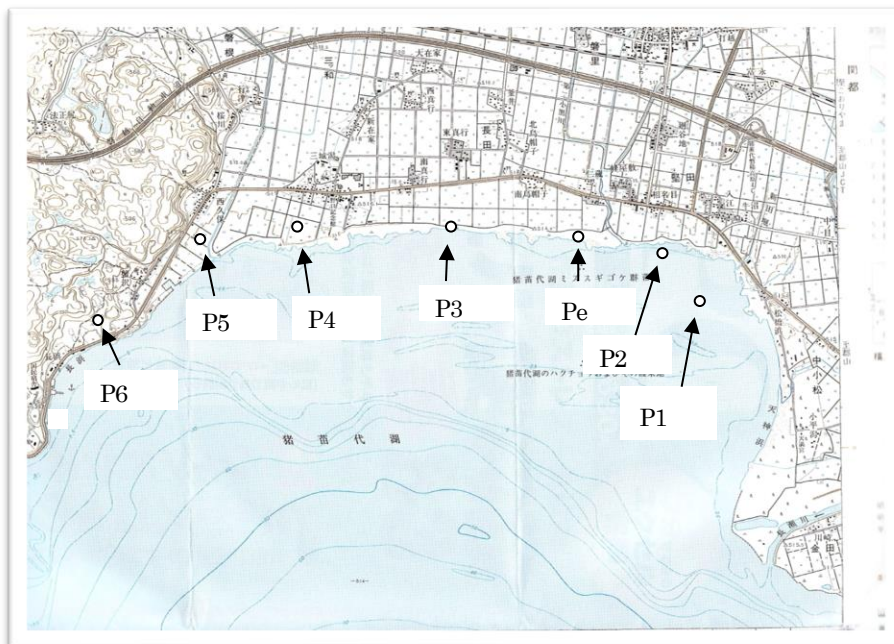
写真12 P6 蟹沢浜

表2 鳥類の区分 (科で表示)

水辺の鳥	カモ カイツブリ ウ サギ クイナ チドリ シギ カモメ カワセミ ヨシキリ セキレイ
山野の鳥	キジ ハト カッコウ タカ キツツキ モズ カラス シジュウカラ ヒバリ ツバメ ヒヨドリ ウグイス ムシクイ ムクドリ ヒタキ スズメ アトリ ホオジロ

水辺と山野の環境を好む鳥類の一部を科について区分した。鳥類種が利用している環境の様子を推測する事ができ、生息環境の保全を考える際に参考となる。

図1 調査地点位置 (国土地理院地図 猪苗代から)



### 3.調査の結果と考察

#### 3.1 令和02年(2020)調査の結果(確認種 羽数 水辺種と山野種の相違など)

地点毎の優占度(dominance)の高い種(羽数の多い種)と出現率(occurrence rate)の高い種について、以前と同様に記録を整理した。観察された種と羽数を繁殖期の4月から8月と越冬期の10月から12月の二つの期間毎に分けて集計し、各期に多く生息している種類を抽出した。優先種は観察地点で羽数の多い種を表し、出現率は観察地点でその種が観察される割合で、出会う割合といえる。表9に今年度2020年の観察日時を示した。

・4月から12月までの通期 優占種は表3から、ホシハジロ オナガガモ オオバン キンクロハジロ カルガモ コハクチョウ オオヨシキリ コガモ カワウ スズメの水辺の鳥で冬鳥と留鳥が多い。昨年と順位が異なるが、上位は変わらない。カルガモ オオヨシキリ カワラヒワ カワウ カンムリカイツブリ カイツブリが上位を占める。優占種からみると、水辺の鳥が全体の約87%となり、内訳は冬鳥が71%を占め、次いで留鳥が11%占めている。山野の鳥は13%と少ない。

・繁殖期と越冬期の各期 水辺の鳥が各期60%と94%を占め、この地域が水辺の鳥の生息地となっている。繁殖期は、オオヨシキリ カルガモ ムクドリ カワウ スズメ カワラヒワ等が多く、越冬期は、ホシハジロ オナガガモ キンクロハジロ オオバン コハクチョウ カルガモ マガモ等でカモ類の羽数と種類が多い。オオバンは通期で観察され、増加傾向にある。

表3 2020年通期全体の優先・出現種

No.	no.	優占種	%	no.	出現率	%
1	48	ホシハジロ 冬鳥	19.2	42	カルガモ 留鳥	47.3
2	55	オナガガモ 冬鳥	17.1	76	オオヨシキリ 夏鳥	37.4
3	61	オオバン 冬鳥	12.1	1	カワラヒワ 留鳥	36.3
4	51	キンクロハジロ 冬鳥	8.7	28	カワウ 留鳥	35.2
5	42	カルガモ 留鳥	6.6	45	カンムリカイツブリ 冬鳥	35.2
6	59	コハクチョウ 冬鳥	4.4	43	カイツブリ 留鳥	27.5
7	76	オオヨシキリ 夏鳥	4.2	31	ツバメ 夏鳥	26.4
8	52	コガモ 冬鳥	4.0	61	オオバン 冬鳥	25.3
9	28	カワウ 留鳥	2.4	8	シジュウカラ 留鳥	25.3
10	6	スズメ 留鳥	2.2	29	ハシボソガラス 留鳥	24.2
11	1	カワラヒワ 留鳥	1.9	2	ヒヨドリ 留鳥	23.1
12	63	マガン 冬鳥	1.5	6	スズメ 留鳥	22.0
13	53	マガモ 冬鳥	1.5	15	ウグイス 留鳥	20.9
14	10	ムクドリ 留鳥	1.5	51	キンクロハジロ 冬鳥	19.8
15	43	カイツブリ 留鳥	1.2	59	コハクチョウ 冬鳥	19.8
16	45	カンムリカイツブリ 冬鳥	1.1	66	ヒバリ 夏鳥	18.7
17	18	カシラダカ 冬鳥	0.9	25	ハクセキレイ 留鳥	17.6
18	29	ハシボソガラス 留鳥	0.9	4	トビ 留鳥	17.6
19	8	シジュウカラ 留鳥	0.8	77	コヨシキリ 夏鳥	16.5
20	50	スズガモ 冬鳥	0.8	22	アオサギ 留鳥	16.5
21	31	ツバメ 夏鳥	0.7	10	ムクドリ 留鳥	15.4
22	2	ヒヨドリ 留鳥	0.5	7	モズ 留鳥	15.4
23	110	ニューナイスズメ 留鳥	0.5	21	ダイサギ 留鳥	14.3
24	66	ヒバリ 夏鳥	0.5	48	ホシハジロ 冬鳥	11.0
25	15	ウグイス 留鳥	0.4	55	オナガガモ 冬鳥	8.8
26	25	ハクセキレイ 留鳥	0.4	53	マガモ 冬鳥	8.8
27	19	アトリ 冬鳥	0.4	18	カシラダカ 冬鳥	8.8
28	4	トビ 留鳥	0.3	12	コゲラ 留鳥	8.8
29	49	ヒドリガモ 冬鳥	0.3	65	バン 漂鳥・?	7.7
30	21	ダイサギ 留鳥	0.3	41	キジバト 留鳥	7.7
31	77	コヨシキリ 夏鳥	0.3	3	ホオジロ 留鳥	7.7
32	22	アオサギ 留鳥	0.3	52	コガモ 冬鳥	5.5
33	17	ツグミ 冬鳥	0.2	17	ツグミ 冬鳥	5.5
34	7	モズ 留鳥	0.2	36	ヨシゴイ 夏鳥	5.5
35	65	バン 漂鳥・?	0.2	5	ノスリ 留鳥	5.5

表4 2020年通期全体優先種内容

全体	%	内訳	%
水辺の鳥	87.1	留鳥	11.3
		夏鳥	4.8
		冬鳥	71.0
		旅鳥	0.0
山野の鳥	12.9	留鳥	9.5
		夏鳥	1.2
		冬鳥	1.8
		旅鳥	0.0

表5-1 2020年 繁殖期優占種

全体	%	内訳	%
水辺の鳥	59.7	留鳥	21.1
		夏鳥	25.1
		冬鳥	13.6
		旅鳥	0.0
山野の鳥	40.3	留鳥	32.0
		夏鳥	6.1
		冬鳥	2.1
		旅鳥	0.0

表5-2 2020年 越冬期優占種

全体	%	内訳	%
水辺の鳥	94.4	留鳥	8.4
		夏鳥	0.1
		冬鳥	85.9
		旅鳥	0.0
山野の鳥	5.6	留鳥	4.0
		夏鳥	0.0
		冬鳥	1.6
		旅鳥	0.0

観察地点毎に見ると、繁殖期の優先種(表6-1)は、P1,P2,Pe,P3,P4 地点でオオヨシキリが優占種となり昨年より増えている。水辺の鳥が約60%を占め、他の所は、カルガモとツバメが優占種となっている。観察記録のコハクチョウは怪我等による残留個体、P1,Pe,P5のキンクロハジロは渡りの遅い個体である。その他の地点では、オオバン ムクドリ カルガモ スズメ カンムリカイツブリが上位の優占種となった。出現種(表6-3)から、オオヨシキリ カルガモ カワウ ツバメ カンムリカイツブリが

上位を占める。越冬期(表6-2,表6-4)についてみると、ホシハジロがP1,Pe,P4に多く、オオバンはP1,P5,P6に、カルガモはP6に、コハクチョウはP2,P5に多く見られた。確認種一覧(表10)から、繁殖期50種、越冬期49種、通期66種が観察された。昨年H31年64種より多く、H28の77種より少ない。観察種について比較するとR02年は、アトリ オオヨシガモ マガン タゲリ マヒワ カッコウ コサメビタキ ノビタキ ミサゴ等が観察され、他方 ゴイサギ チュウサギ シメ ヨシガモ ケリ コサギ オオタカ キビタキ チゴハヤブサ等が観察されなかった。

表6-1 観察地点毎の優占種 繁殖期

2020 観察地点毎の優占種 繁殖期(4月~8月)																
No.	P1 種名・和名	%	P2 種名・和名	%	Pe 種名・和名	%	P3 種名・和名	%	P4 種名・和名	%	P5 種名・和名	%	P6 種名・和名	%	全体 種名・和名	%
1	オオヨシキリ	17.9	オオヨシキリ	24.9	オオヨシキリ	21.9	オオヨシキリ	37.9	オオヨシキリ	25.9	カワウ	30.8	コハクチョウ	16.2	オオヨシキリ	22.6
2	カンムリカイツブリ	13.4	カルガモ	11.6	カルガモ	12.2	カワラヒワ	11.9	ムクドリ	13.9	ムクドリ	19.2	ムクドリ	14.9	カルガモ	9.0
3	カワウ	10.7	カイツブリ	11.0	オオバン	9.7	スズメ	8.9	スズメ	7.6	カルガモ	11.5	カルガモ	8.1	ムクドリ	7.8
4	ヒヨドリ	9.8	スズメ	8.1	キンクロハジロ	8.9	ムクドリ	7.7	ウグイス	6.3	キンクロハジロ	11.5	カワラヒワ	6.8	カワウ	5.3
5	カルガモ	8.0	ツバメ	7.5	ムクドリ	6.6	ハンソングラス	6.8	カルガモ	6.3	カンムリカイツブリ	4.8	ヒヨドリ	6.8	スズメ	5.2
6	キンクロハジロ	6.3	オオバン	6.9	カイツブリ	6.4	ヒバリ	6.0	シジュウカラ	5.1	ツバメ	3.8	トビ	6.8	カワラヒワ	4.8
7	ツバメ	5.4	カワラヒワ	5.8	シジュウカラ	3.9	カルガモ	3.8	ヒヨドリ	4.4	オオヨシキリ	2.9	スズメ	6.8	キンクロハジロ	4.4
8	カワラヒワ	4.5	カワウ	5.2	スズメ	3.0	コヨシキリ	3.0	ハンソングラス	4.4	オオヨシキリ	2.9	ツバメ	6.8	カイツブリ	4.1
9	カイツブリ	4.5	カンムリカイツブリ	5.2	カワウ	3.0	ツバメ	2.1	コゲラ	3.2	カワラヒワ	1.9	スズガモ	5.4	オオバン	3.9
10	ウグイス	2.7	コヨシキリ	2.9	カンムリカイツブリ	3.0	モズ	1.7	ツグミ	3.2	ウグイス	1.9	シジュウカラ	2.7	カンムリカイツブリ	3.5
11	ガビチョウ	2.7	ヒバリ	2.3	マヒワ	2.8	カシラダカ	1.7	ツバメ	3.2	ハンソングラス	1.9	メジロ	2.7	ツバメ	3.2
12	ホオジロ	1.8	キンクロハジロ	1.7	ハンソングラス	1.9	ヒヨドリ	1.3	カワラヒワ	2.5	トビ	1.0	コゲラ	2.7	ハンソングラス	2.8
13	トビ	1.8	アオサギ	1.2	ヒバリ	1.9	トビ	1.3	ヒバリ	2.5	エナガ	1.0	カシラダカ	2.7	ヒバリ	2.5
14	アオサギ	1.8	ハクセキレイ	1.2	コヨシキリ	1.9	ウグイス	1.3	モズ	1.9	ダイサギ	1.0	モズ	1.4	ヒヨドリ	2.2
15	セグロセキレイ	1.8	スズガモ	1.2	カワラヒワ	1.4	ハクセキレイ	0.9	キジバト	1.9	アオサギ	1.0	ウグイス	1.4	シジュウカラ	2.1
16	ハンソングラス	1.8	ヒヨドリ	1.6	カシラダカ	1.4	キジバト	0.9	コムクドリ	1.3	ハクセキレイ	1.0	カワセミ	1.4	ウグイス	2.0
17	シジュウカラ	0.9	トビ	0.6	アオサギ	1.4	カンムリカイツブリ	0.9	ニューナイスズメ	1.3	カイツブリ	1.0	ハクセキレイ	1.4	コヨシキリ	1.6
18	コゲラ	0.9	ウグイス	0.6	キジバト	1.4	コガモ	0.9	ホオジロ	0.6	ヒバリ	1.0	キセキレイ	1.4	トビ	1.2
19	ハクセキレイ	0.9	ヨシゴイ	0.6	ハンソングラス	1.4	ノスリ	0.4	ノスリ	0.6	ヒヨドリ	1.0	カワウ	1.4	コハクチョウ	1.1
20	ハンソングラス	0.9	キジバト	0.6	ウグイス	1.1	コムクドリ	0.4	アオサギ	0.6	ホオジロ	0.0	コサメビタキ	1.4	キジバト	1.0

表6-2 観察地点毎の優占種 越冬期

2020 観察地点毎の優占種 越冬期(10月~12月)																
No.	P1 種名・和名	%	P2 種名・和名	%	Pe 種名・和名	%	P3 種名・和名	%	P4 種名・和名	%	P5 種名・和名	%	P6 種名・和名	%	全体 種名・和名	%
1	オオバン	34.8	オナガガモ	30.0	オナガガモ	43.0	カシラダカ	24.7	ホシハジロ	36.9	コハクチョウ	36.8	カルガモ	71.5	ホシハジロ	25.5
2	ホシハジロ	34.7	キンクロハジロ	18.0	ホシハジロ	24.4	スズメ	17.7	キンクロハジロ	27.1	オオバン	22.4	スズガモ	15.8	オナガガモ	20.1
3	キンクロハジロ	11.0	コハクチョウ	8.8	コガモ	10.8	カルガモ	14.6	オナガガモ	7.0	ハンソングラス	13.6	オオバン	5.9	オオバン	14.0
4	コハクチョウ	5.5	ホシハジロ	8.4	コハクチョウ	7.3	マガモ	7.6	スズメ	6.5	カルガモ	8.0	ヒヨドリガモ	4.0	キンクロハジロ	9.3
5	マガモ	5.0	カワウ	7.0	マガン	3.4	シジュウカラ	6.3	オオバン	6.2	オナガガモ	8.0	シジュウカラ	1.2	コハクチョウ	6.3
6	カルガモ	3.2	コガモ	6.9	カルガモ	2.2	キンクロハジロ	3.8	マガン	4.4	ハジロカイツブリ	4.8	オナガガモ	0.8	カルガモ	6.0
7	オナガガモ	2.6	カルガモ	5.2	カワウ	1.9	オオバン	3.8	カワラヒワ	2.2	カワラヒワ	1.6	ハクセキレイ	0.4	コガモ	4.5
8	カンムリカイツブリ	0.6	オオバン	5.1	オオバン	1.9	カワウ	3.2	コハクチョウ	1.7	アオサギ	1.6	マガモ	0.4	マガモ	2.5
9	カイツブリ	0.5	マガモ	3.6	アトリ	1.0	コガモ	3.2	ヒヨドリガモ	1.2	ホシハジロ	1.6	カワラヒワ	0.0	マガン	1.8
10	カワラヒワ	0.3	カワラヒワ	3.1	カワラヒワ	0.6	ツグミ	2.5	マガモ	1.2	トビ	0.8	ヒヨドリ	0.0	カワウ	1.6
11	スズガモ	0.3	カンムリカイツブリ	1.5	カシラダカ	0.6	カイツブリ	2.5	ムクドリ	0.8	ダイサギ	0.8	ホオジロ	0.0	スズメ	1.4
12	シジュウカラ	0.2	カイツブリ	0.6	マガモ	0.4	カワラヒワ	1.9	ツグミ	0.7	ヒヨドリ	0.0	トビ	0.0	カワラヒワ	1.0
13	ダイサギ	0.2	シジュウカラ	0.3	シジュウカラ	0.3	コハクチョウ	1.9	アトリ	0.6	ホオジロ	0.0	ノスリ	0.0	カシラダカ	0.9
14	カワウ	0.2	ハクセキレイ	0.3	オオハクチョウ	0.3	アオサギ	1.3	シジュウカラ	0.5	ノスリ	0.0	スズメ	0.0	スズガモ	0.8
15	ホオジロ	0.1	ハジロカイツブリ	0.3	スズメ	0.2	ハンソングラス	1.3	トビ	0.4	スズメ	0.0	モズ	0.0	シジュウカラ	0.5
16	ウグイス	0.1	ヒヨドリ	0.1	ダイサギ	0.2	カンムリカイツブリ	1.3	ハンソングラス	0.4	モズ	0.0	エナガ	0.0	カンムリカイツブリ	0.5
17	ツグミ	0.1	モズ	0.1	パン	0.2	コゲラ	1.6	シジュウカラ	0.4	ムクドリ	0.0	ハンソングラス	0.4	ムクドリ	0.4
18	ハジロカイツブリ	0.1	ダイサギ	0.1	トビ	0.2	アカゲラ	0.6	マヒワ	0.4	エナガ	0.0	メジロ	0.0	アトリ	0.4
19	オオカシガモ	0.1	セグロセキレイ	0.1	ハンソングラス	0.1	カワセミ	0.6	ヒヨドリ	0.2	ムクドリ	0.2	コゲラ	0.0	ヒヨドリガモ	0.4
20	ヒヨドリガモ	0.1	ミコアイサ	0.1	カンムリカイツブリ	0.1	ダイサギ	0.6	ホオジロ	0.2	メジロ	0.0	アオゲラ	0.0	カイツブリ	0.3

表6-3 観察地点毎の出現種 繁殖期

2020 観察地点毎の出現種 繁殖期(4月~8月)																
No.	P1 種名・和名	%	P2 種名・和名	%	Pe 種名・和名	%	P3 種名・和名	%	P4 種名・和名	%	P5 種名・和名	%	P6 種名・和名	%	全体 種名・和名	%
1	オオヨシキリ	46.2	カイツブリ	53.8	カルガモ	53.8	オオヨシキリ	46.2	ウグイス	53.8	カワウ	46.2	コハクチョウ	30.8	オオヨシキリ	33.0
2	ヒヨドリ	38.5	ツバメ	46.2	オオヨシキリ	46.2	カワラヒワ	38.5	オオヨシキリ	38.5	カルガモ	38.5	ヒヨドリ	30.8	カルガモ	28.6
3	カンムリカイツブリ	30.8	オオヨシキリ	38.5	オオバン	46.2	ヒバリ	38.5	ムクドリ	30.8	カンムリカイツブリ	23.1	トビ	23.1	カワウ	23.1
4	カワウ	30.8	カルガモ	38.5	カワウ	38.5	コヨシキリ	38.5	コゲラ	30.8	ツバメ	23.1	スズメ	23.1	ツバメ	23.1
5	カイツブリ	30.8	カワウ	38.5	カンムリカイツブリ	38.5	モズ	30.8	スズメ	23.1	オオヨシキリ	15.4	ムクドリ	15.4	カンムリカイツブリ	22.0
6	カルガモ	23.1	カンムリカイツブリ	38.5	ハンソングラス	38.5	スズメ	23.1	カルガモ	23.1	カワラヒワ	15.4	カルガモ	15.4	カワラヒワ	19.8
7	ツバメ	23.1	コヨシキリ	30.8	コヨシキリ	38.5	ムクドリ	38.5	シジュウカラ	23.1	ウグイス	15.4	カワラヒワ	15.4	カイツブリ	19.8
8	カワラヒワ	23.1	ヒバリ	30.8	カイツブリ	30.8	ツバメ	23.1	ヒヨドリ	23.1	ハンソングラス	15.4	ツバメ	15.4	ヒバリ	17.6
9	ガビチョウ	23.1	スズメ	23.1	キンクロハジロ	23.1	ヒヨドリ	15.4	ハンソングラス	23.1	ムクドリ	7.7	コゲラ	15.4	ウグイス	17.6
10	キンクロハジロ	15.4	オオバン	15.4	ムクドリ	23.1	トビ	15.4	ツバメ	23.1	キンクロハジロ	7.7	スズガモ	7.7	ヒヨドリ	16.5
11	ウグイス	15.4	カワラヒワ	15.4	ヒバリ	23.1	カンムリカイツブリ	15.4	カワラヒワ	23.1	オシドリ	7.7	シジュウカラ	7.7	コヨシキリ	16.5
12	ホオジロ	15.4	キンクロハジロ	15.4	アオサギ	23.1	ハンソングラス	7.7	ヒバリ	23.1	トビ	7.7	メジロ	7.7	スズメ	15.4
13	トビ	15.4	アオサギ	15.4	パン	23.1	カルガモ	7.7	モズ	23.1	エナガ	7.7	カシラダカ	7.7	ムクドリ	14.3
14	アオサギ	15.4	ハクセキレイ	15.4	モズ	23.1	カシラダカ	7.7	キジバト	15.4	ダイサギ	7.7	モズ	7.7	ハンソングラス	14.3
15	ハンソングラス	15.4	スズガモ	7.7	スズメ	15.4	ウグイス	7.7	コムクドリ	15.4	アオサギ	7.7	ウグイス	7.7	トビ	12.1
16	セグロセキレイ	7.7	ヒヨドリ	7.7	キジバト	15.4	ハクセキレイ	7.7	ツグミ	7.7	ハクセキレイ	7.7	カワセミ	7.7	モズ	12.1
17	シジュウカラ	7.7	トビ	7.7	ウグイス	15.4	キジバト	7.7	ニューナイスズメ	7.7	カイツブリ	7.7	ハクセキレイ	7.7	アオサギ	9.9
18	コゲラ	7.7	ウグイス	7.7	ハクセキレイ	15.4	コガモ	7.7	ホオジロ	7.7	ヒバリ	7.7	キセキレイ	7.7	キンクロハジロ	8.8
19	ハクセキレイ	7.7	ヨシゴイ	7.7	ハンソングラス	15.4	ノスリ	7.7	ノスリ	7.7	ヒヨドリ	7.7	カワウ	7.7	オオバン	8.8
20	ハンソングラス	7.7	キジバト	7.7	トビ	15.4	コムクドリ	7.7	アオサギ	7.7	ホオジロ	0.0	コサメビタキ	7.7	ハクセキレイ	8.8

表6-4 観察地点毎の出現種 越冬期

2020 観察地点毎の出現種 越冬期(10月～12月)																
No.	P1		P2		P <sub>e</sub>		P3		P4		P5		P6		全体	
	種名・和名	%	種名・和名	%	種名・和名	%	種名・和名	%	種名・和名	%	種名・和名	%	種名・和名	%	種名・和名	%
1	オオバン	100.0	キンクロハジロ	100.0	コハクチョウ	100.0	カシラダカ	100.0	ホシハジロ	66.7	コハクチョウ	66.7	カルガモ	100.0	オオバン	71.4
2	ホシハジロ	100.0	ホシハジロ	100.0	カワウ	100.0	シジュウカラ	100.0	キンクロハジロ	66.7	オオバン	66.7	シジュウカラ	100.0	シジュウカラ	66.7
3	キンクロハジロ	100.0	カワウ	100.0	オオバン	100.0	スズメ	66.7	スズメ	66.7	ハシボソガラス	66.7	オオバン	66.7	コハクチョウ	61.9
4	コハクチョウ	100.0	オオバン	100.0	シジュウカラ	100.0	カルガモ	66.7	カワラヒワ	66.7	カルガモ	33.3	スズガモ	33.3	カルガモ	61.9
5	カンムリカイツブリ	100.0	カンムリカイツブリ	100.0	カンムリカイツブリ	100.0	コワラヒワ	66.7	コハクチョウ	66.7	オナガガモ	33.3	ヒドリガモ	33.3	コワラヒワ	52.4
6	カワラヒワ	100.0	コハクチョウ	66.7	オナガガモ	66.7	アオサギ	66.7	ツグミ	66.7	ハジロカイツブリ	33.3	オナガガモ	33.3	ホシハジロ	47.6
7	マガモ	66.7	コガモ	66.7	カルガモ	66.7	マガモ	33.3	シジュウカラ	66.7	カワラヒワ	33.3	ハクセキレイ	33.3	カンムリカイツブリ	47.6
8	カルガモ	66.7	カルガモ	66.7	カワラヒワ	66.7	キンクロハジロ	33.3	ハシボソガラス	66.7	アオサギ	33.3	マガモ	33.3	キンクロハジロ	42.9
9	オナガガモ	66.7	マガモ	66.7	カシラダカ	66.7	オオバン	66.7	ホオジロ	66.7	ホシハジロ	33.3	カワラヒワ	0.0	オナガガモ	38.1
10	シジュウカラ	66.7	ハシロカイツブリ	66.7	ダイサギ	66.7	カワウ	33.3	オナガガモ	33.3	トビ	33.3	ヒヨドリ	0.0	マガモ	38.1
11	ダイサギ	66.7	オナガガモ	33.3	トビ	66.7	コガモ	33.3	オオバン	33.3	ダイサギ	33.3	ホオジロ	0.0	カワウ	38.1
12	ホオジロ	66.7	カワラヒワ	33.3	ハシボソガラス	66.7	ツグミ	33.3	マガン	33.3	ヒヨドリ	0.0	トビ	0.0	ハシボソガラス	38.1
13	ウグイス	66.7	カイツブリ	33.3	ノスリ	66.7	カイツブリ	33.3	ヒドリガモ	33.3	ホオジロ	0.0	ノスリ	0.0	ダイサギ	33.3
14	カイツブリ	33.3	シジュウカラ	33.3	ホシハジロ	33.3	コハクチョウ	33.3	マガモ	33.3	ノスリ	0.0	スズメ	0.0	スズメ	23.8
15	スズガモ	33.3	ハクセキレイ	33.3	コガモ	33.3	ハシボソガラス	33.3	ムクドリ	33.3	スズメ	0.0	モズ	0.0	カシラダカ	23.8
16	カワウ	33.3	ヒヨドリ	33.3	マガン	33.3	カンムリカイツブリ	33.3	アトリ	33.3	モズ	0.0	エナガ	0.0	コガモ	19.0
17	ツグミ	33.3	モズ	33.3	アトリ	33.3	コゲラ	33.3	シジュウカラ	0.0	ムクドリ	0.0	カイツブリ	0.0	カイツブリ	19.0
18	ハシロカイツブリ	33.3	ダイサギ	33.3	マガモ	33.3	アカゲラ	33.3	カルガモ	33.3	エナガ	0.0	メジロ	0.0	ツグミ	19.0
19	オカヨシガモ	33.3	セグロセキレイ	33.3	オオハクチョウ	33.3	カワセミ	33.3	マヒワ	33.3	ムクドリ	0.0	コゲラ	0.0	ハジロカイツブリ	19.0
20	ヒドリガモ	33.3	ミコアイサ	33.3	スズメ	33.3	ダイサギ	33.3	ヒヨドリ	33.3	メジロ	0.0	アオゲラ	0.0	トビ	19.0

表7 観察されたRL選定種

2020年観察された福島県レッドリスト選定種							
No.	種名・和名	2017年改訂 カテゴリー			2018	2019	2020
		新	旧		調査地点	調査地点	調査地点
1	オオタカ	絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅰ類	VU	P3	P1,P3	
2	チゴモズ	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危惧Ⅰ類	CR	P3		
3	ケリ	絶滅危惧ⅠB類		DD		P <sub>e</sub>	
4	ヨシゴイ	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧Ⅱ類	NT	P1,P <sub>e</sub>	P2	P1,P2,P3
5	チゴハヤブサ	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧		P <sub>e</sub>	P4	
6	ミサゴ	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類	NT	P5		P4
7	コサメビタキ	準絶滅危惧	絶滅危惧Ⅱ類		P6		P6
8	チュウサギ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	NT		P2,P5	
9	ヒバリ	準絶滅危惧	準絶滅危惧		P2,P <sub>e</sub> ,P3	P2,P <sub>e</sub> ,P3,P4,P5	P2,P <sub>e</sub> ,P3,P4,P5
10	オオヨシキリ	準絶滅危惧	準絶滅危惧		P1,P2,P <sub>e</sub> ,P3,P4,P5	P1,P2,P <sub>e</sub> ,P3,P4,P5	P1,P2,P <sub>e</sub> ,P3,P4,P5
11	コヨシキリ	準絶滅危惧	準絶滅危惧		P2,P <sub>e</sub> ,P3,P4	P2,P <sub>e</sub> ,P3	P2,P <sub>e</sub> ,P3,P4
12	ハイタカ	準絶滅危惧	準絶滅危惧	NT	P <sub>e</sub> ,P3	P <sub>e</sub> ,P3	P <sub>e</sub>
13	バン	準絶滅危惧	準絶滅危惧		P2,P <sub>e</sub> ,P3	P1,P2,P <sub>e</sub> ,P3,P4	P2,P <sub>e</sub>
14	オオバン		希少		P1,P2,P <sub>e</sub> ,P3,P5,P6	P1,P2,P <sub>e</sub> ,P3,P4,P5	P1,P2,P <sub>e</sub> ,P3,P4,P5,P6
15	オシドリ	準絶滅危惧					P2
16	カッコウ	準絶滅危惧			P <sub>e</sub>		P2
17	マガン	準絶滅危惧					P <sub>e</sub> ,P4
18	コサギ	準絶滅危惧			P2		
19	タゲリ	準絶滅危惧					P <sub>e</sub>
				種数	13	10	12

\*レッドリスト選定種について、表7と表8から、観察種のレッドリスト選定種のカテゴリー毎に区分すると、2018年は13種、2019年は10種で、ケリが観察され、2020年は12種となった。オオタカ チゴハヤブサ ケリ チュウサギ が観察されず、ミサゴ コサメビタキ カッコウ オシドリ マガン タゲリが観察された。9年間で、選定種総数は26種で、絶滅危惧Ⅰ類がチゴモズ ケリ、絶滅危惧Ⅱ類がオオタカ ハヤブサ チゴハヤブサ ヨシゴイが観察されている。準絶滅危惧が20種となった。観察回数が増えたことにより、精度がよくなったものと思われる。観察回数の多い種は、オオタカ ヨシゴイ ヒバリ オオヨシキリ コヨシキリ バン マガン チュウサギ オシドリ カッコウであり、繁殖或いは繁殖の可能性が高い。今後の生息状況を見守ることと環境保全が課題となろう。コサメビタキ サシバ サンショウクイの観察回数がすくなく、周辺での繁殖も少なくなっているものと推測される。調査を実施した9年間について、観察種の変化(表10)を見ると、出現種について64種に変化がみられた。一度しか観察されなかった種は、ハマシギ アマツバメ アオジ ツミ サシバ ヒレンジャク キバシリ クイナ ホトトギス キジ チゴモズ イソシギ サンショウクイ の13種で、比較的数の少ない種が多い。最近3年間で観察されなかった種は、イワツバメ アマツバメ アジサシ ハマシギ エゾビタキ ヒシクイ セッカ アオジ イカル ツミ ハヤブサ オオジュリン ベニ



マシコ ミヤマガラス キバシリ クイナ イソシギ サンショウクイ ホトトギス ヒレンジャクの21種でした。夏鳥や冬鳥の渡り鳥は観察年による羽数の変動がみられる。生息羽数の少ないハイタカやツミクイナは、観察され難いためであろう。コサギやチュウサギ、ゴイサギは全国的に数が減っているとの報告があり、猪苗代湖でも観察数は減少している。草原などの開けた処を生息地としている種やツバメ類も個体数を減らしている報告もあり、猪苗代湖でも同様の傾向がみられる。2017年に福島県のレッドリストRLが見直しされて、選定種が90種に増えた。

表8 9年間で観察したレッドリストRL

9年間で観察された福島県レッドリスト選定種												
No.	種名・和名	福島県	環境	調査地点								
				2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
1	オオタカ	絶滅危惧Ⅱ類	VU	P4	P1,P2	P4	P2,Pe	P1,P2	P5	P3	P1,P3	
2	ハヤブサ	絶滅危惧Ⅱ類	VU	P2			P1	P4	P1			
3	テゴモズ	絶滅危惧ⅠA類	CR							P3		
4	ケリ	絶滅危惧ⅠB類	DD	P2				P1			Pe	
5	ヨシゴイ	絶滅危惧Ⅱ類	NT	P1,P2,Pe,P5	P1,P2,Pe,P3,P6	P2,Pe,P5	P2,Pe,P3	P1,P2,Pe,P3	Pe,P4	P1,Pe	P2	P1,P2,P3
6	子ゴハヤブサ	絶滅危惧Ⅱ類								Pe	P4	
7	セッカ	準絶滅危惧		P2			P2					
8	ミサゴ	準絶滅危惧	NT						P4	P5		P4
9	コサメビタキ	準絶滅危惧				Pe				P6		P6
10	サンバ	準絶滅危惧	VU			P1						
11	ヒバリ	準絶滅危惧		P1,P2,Pe,P3,P4	P1,P2,Pe,P3,P4,P5	P2,Pe,P3,P4,P5	P1,P2,Pe,P3,P4,P5	P2,Pe,P3,P4,P5	P1,P2,Pe,P3,P4,P5	P2,Pe,P3	P2,Pe,P3,P4,P5	P2,Pe,P3,P4,P5
12	オオヨシキリ	準絶滅危惧		P1,P2,Pe,P3,P4,P5	P1,P2,Pe,P3,P4	P1,P2,Pe,P3,P4	P1,P2,Pe,P3,P4,P5,P6	P1,P2,Pe,P3,P4,P5,P6	P1,P2,Pe,P3,P4,P5	P1,P2,Pe,P3,P4,P5	P1,P2,Pe,P3,P4,P5	P1,P2,Pe,P3,P4,P5
13	コヨシキリ	準絶滅危惧		P1,P2,Pe,P3,P4	P2,Pe,P3	P2,Pe,P3,P4	P2,Pe,P3	P1,P2,Pe,P3,P4	P1,P2,Pe,P3,P4	P2,Pe,P3,P4	P2,Pe,P3	P2,Pe,P3,P4
14	ハイタカ	準絶滅危惧	NT	P2	P3	P3		Pe			Pe,P3	Pe
15	バン	準絶滅危惧		Pe,P3,P5	P1,P2,Pe,P3	P1,P2,Pe,P3	P1,P2,Pe,P3,P4	P2,Pe,P3,P4	P1,P2,Pe,P3,P4	P2,Pe,P3	P1,P2,Pe,P3,P4	P2,Pe
16	サンショウクイ	準絶滅危惧	VU					P4				
17	キバシリ	準絶滅危惧				Pe						Pe
18	タゲリ	準絶滅危惧				P4						Pe,P4
19	マガン	準絶滅危惧	NT	P2	P2		P3					
20	ツミ	準絶滅危惧		P2								
21	チョウゲンボウ	準絶滅危惧				P4			P3			
22	チュウサギ	準絶滅危惧	NT	Pe	Pe,P3,P4	P2		P3	P5		P2,P5	
23	クイナ	準絶滅危惧		P2,Pe	P2							
24	オンドリ	準絶滅危惧	DD					Pe,P3	Pe,P3			P2
25	カッコウ	準絶滅危惧						P3,P4	Pe			P2
26	コサギ	準絶滅危惧								P2		
			種数	14	11	13	9	13	12	13	10	12



写真13 ダイサギとオオバン

表9 観察日時 2020年

R02年度2020 観察日時				
No.	月日	時間	始	終
1	4月16日		7:30	10:10
2	5月7日		7:00	9:55
3	5月28日		7:00	9:35
4	6月16日		6:30	9:45
5	6月29日		6:30	9:45
6	7月18日		8:00	11:10
7	8月3日		6:40	9:50
8	8月24日		6:40	9:20
9	9月8日		6:40	9:40
10	10月18日		8:20	11:30
11	11月17日		8:20	11:15
12	12月5日		8:20	11:20



写真14 カワウとカモ類



写真15 バンの親子



### 3.2 観察種の以前との比較

今回 2020 年の調査で、繁殖期と越冬期の通期 66 種の鳥類を観察した。昨年度 2019 年 64 種であった。年度間の相違を表 10 に示す。平成 15 年調査の確認種は 62 種で、平成 24 年の調査の 72 種、今年度までの平均は 68.2 種となり、今回の令和 02 年度 (2020) は 66 種と平均より 2 種類少ない結果となり、漸減傾向にある。ケリ、サシバや夏鳥とシギ類が少なくなり、他方コムクドリなど草原を好む種や水鳥のカムリカイツブリ、オオバンが増えている。ケリやサシバは、農作業の水田の減少との関連が考えられる。シギ類の減少は、旅鳥で飛来数の変動が大きい、最近では飛来が見られない。遠浅の砂地のあるところを好むので、砂地岸の減少の影響も考えられる。カモ類を含め、水鳥の湖岸の水草や水位の環境が影響しているのであろうが、湖沼の沈水性水草の水鳥の生息への影響についても、課題であろう。観察数の少ないカッコウは、托卵先のオオヨシキリの産卵初期の短い期間に活動するためと個体数が少なくなっていることと推測される。

9 年間の通年の出現種の記録が得られたので、H8 年の資料と H15 年に補足された資料との比較をすると、福島県調査と文献から 76 種の報告がある。平成 24 年 (2012) から令和 02 年 (2020) は、最大 77 種、最少 64 種 平均 68.2 種で減少傾向にある。この間では 108 種観察され、昨年と同様である。前回の報告のように、カイツブリ類 大型猛禽類 シギ類 カモメ類などで、観察されなかった種があり、特に水辺の鳥が少なく、草原性を好む種が増えている傾向にあるといえる。湖岸のヨシ原や樹林帯と農耕地との関連があると推測され、約 15 年と短い期間の比較であるが、生息環境の推移が感じられる。特にガビチョウは、特定外来生物に指定され、要観察種である。従来、生息地は浜通りや中通りで、積雪のある地域での観察例は少なかった。会津地域にも分布を広げていることが確認され、気候温暖化による積雪の減少との関連も考えられる。

この 9 年間でみると、国道 49 号線の小黒川橋の 2019 年の更新工事の他に近郊で大きな土地改変を伴う開発事業はなく、農耕地は基本的に大きい変化は無いが、水田面積が減少し蕎麦畑が増えた。北岸では、H29 年に高橋川周辺の樹木が伐採され、湖の見通しが良くなり、沈水性植物のヒシが増えたことも水鳥への影響が考えられる。釣りやサイクリングなどレジャー客を多く見かけ、特に釣りは繁殖活動への影響が心配される。ヨシ刈りは 2019 年に白鳥浜で 10 月に約 0.5ha 実施され、2020 年は鳥帽子浜と三城潟で同様のヨシ刈りが 10 月に実施された。ヨシ原面積の減少となったので生息する鳥類の影響が懸念される。

表 11 各調査の確認種 (通期) 平成 15 年以前と令和 02 年まで

観察されなかった種	観察されるようになった種
アマサギ ヒクイナ ダイゼン	エナガ アオゲラ アトリ アジサシ
チュウシャクシギ オナガ	ハマシギ クサシギ オカヨシガモ
ソリハシシギ タシギ	ハシビロガモ セッカ アオジ
コアジサシ ミミカイツブリ	ハイタカ ハヤブサ オオジュリン
アカエリカイツブリ	シメ マヒワ ヨシガモ ミヤマガラス
トモエガモ オジロワシ	ラス キバシリ クイナ ガビチョウ
オオワシ セグロカモメ	センダイムシクイ コサメビタキ
オオホシハジロ	ノビタキ サンショウクイ ヒレンジヤク
以上 15 種	ミサゴ チゴハヤブサ
	ニュウナイスズメ 以上 計 28 種

注) 網掛けは水辺の鳥



写真 16 カシラダカ



9年間の鳥類種の数の変化を見ると（図2～6）、最大羽数は、観察日の合計羽数の最大値。

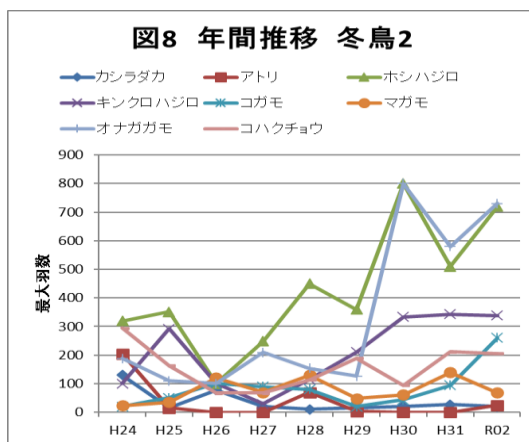
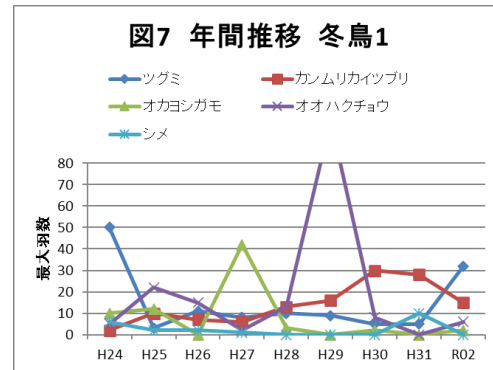
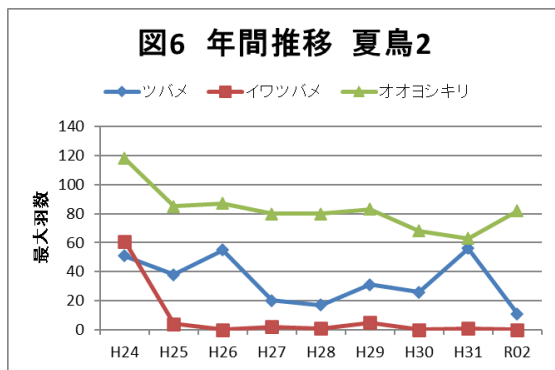
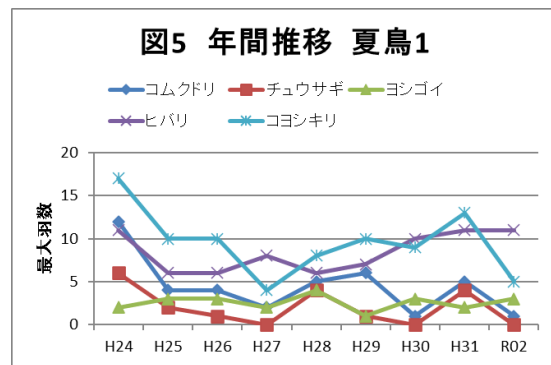
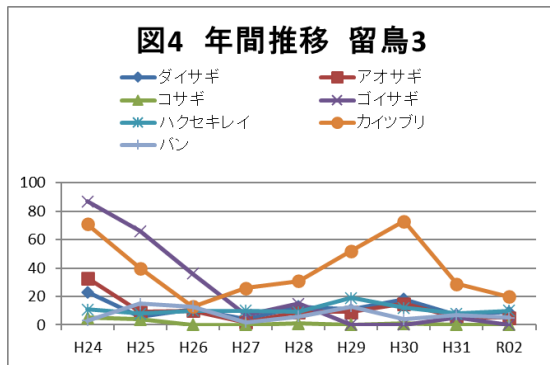
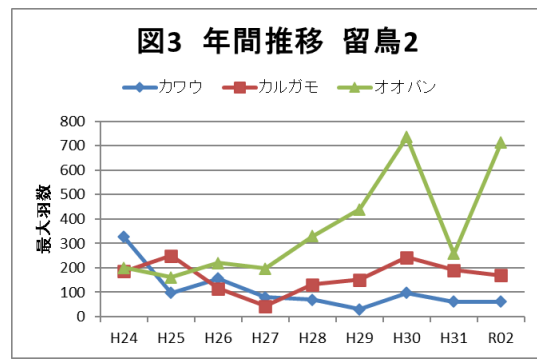
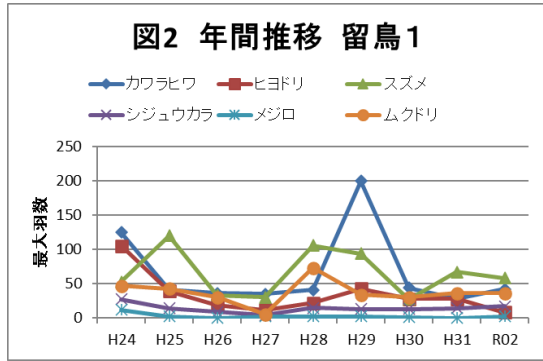


写真17 ヒバリ

観察羽数の年度別の推移をみると、増加傾向はオオバン カンムリカイツブリ ホシハジロ オナ

ガガモの種に見られ、カイツブリは減少に転じた。その他大部分は減少傾向を示した。減少を示した主要な種は、留鳥で、コサギ ゴイサギ アオサギであった。留鳥と夏鳥は、生息数は営巣や採餌の生息環境と密接に関係する。全国的にもサギ類の減少が見られ、コサギ チュウサギなど小型サギが減少し、アオサギ ダイサギ カワウが増加との報告がある。今回の調査では大型サギ類については横ばい傾向である。カイツブリは水草のある環境に生息するので、北岸が丁度良い環境にあるものと思われるが、大型の鳥類との競合で減少しているのかもしれない。北岸地域でH23年に水草のアサザが多く咲いていたが、H26年は少なく、H27年には回復したが、H29年のアサザは少なく、H30年に回復し、H31は少なく、R02は回復が見られた。水草のヒシが増えるなどの環境の変化も今後、自然の変動か否かの観点から検討すべき課題である。カンムリカイツブリは昨年営巣繁殖を確認し、個体数も増加している。

### 3.3 オオヨシキリの分布およびコヨシキリとの関係

北岸の優占種となっている夏鳥のオオヨシキリ (*Acrocephalus arundinaceus*) は、ヨシ原に生息し、猪苗代湖の夏を賑やかにしている。福島県のレッドリスト RL には、準絶滅危惧にランクされている希少種で、全国的には河川改修等によるヨシ原の減少に伴い数を減らしている。体の上面はオリーブ黄褐色で、眉斑は白色の体長 18.5cm。オスはヨシ原の少し高い所で、縄張り主張などのギョギョシヤケケシなど特徴のある声で囀る。営巣はヨシ原の中に作り、4~6個の卵を産み、雛は4週間程度で巣立ちする。生息期間と生息ヨシ原面積について整理した。観察時の生息数は、ヨシ原を広く見通せる位置から、縄張りを主張する囀り個体を記録した。その結果は図9のグラフに示した。北岸での渡来は4月下旬から始まり、繁殖のピークは6月初めから7月上旬で、渡去は8月下旬から9月上旬となっている。2020年は、4月下旬から渡来し、ほぼ例年通りである。渡去の時期も例年並みの9月上旬であった。

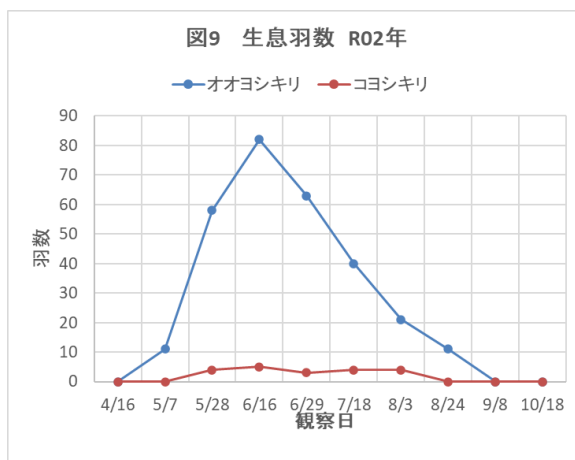


写真18 コヨシキリ



写真19 カンムリカイツブリ



写真20 ガビチョウ

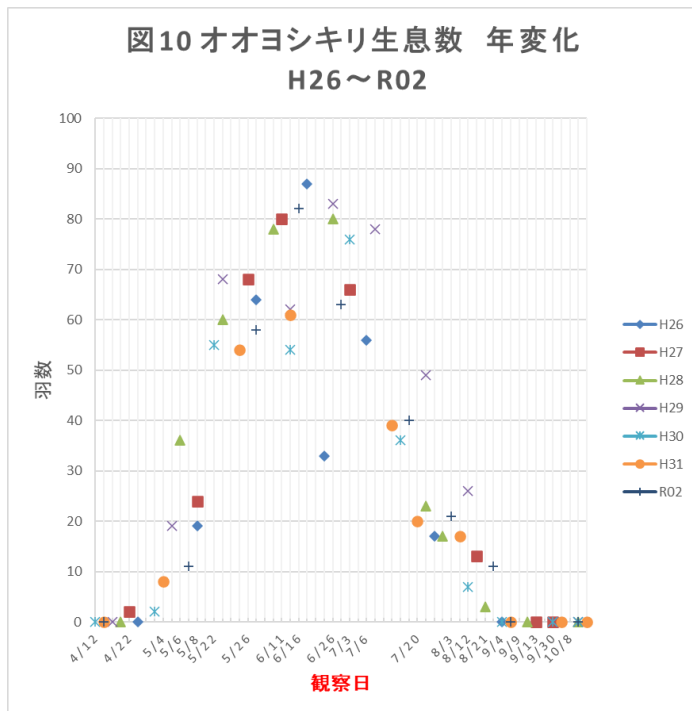


写真 21 オオヨシキリ

飛来数はH24年118羽、H25年85羽、H26年87羽、H27年80羽、H28年80羽、H29年83羽、H30年76羽、H31年61羽、R02年90羽で平均84.4羽より多くなった。調査地域のヨシ原の面積に大きな違いは無いので、自然変動であろう。詳細の要因については採餌状況などの生息環境から検討が必要と思われる。オオヨシキリと同様の環境にコヨシキリも生息している。今回の記録の観察日と生息羽数(図9)から、5月初旬から飛来し、繁殖活動を始め、最大で6月中旬で7羽であった。8月下旬に渡去する。コヨシキリの地点毎の観察合計数(図11)から、P2,Pe,P3のヨシ原が主要な生息地となっている。

図 11 観察地点毎の分布

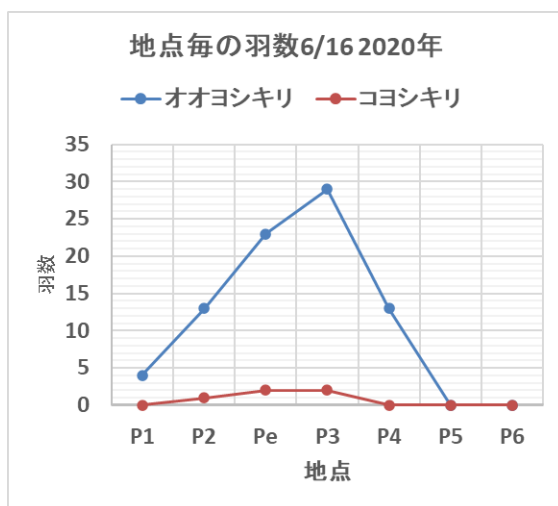


表 13 R02年(2020) オオヨシキリのヨシ原の生息密度

調査区間	面積 ha	羽数	生息密度 羽数/ha
P2~Pe	1.40	15	10.71
Pe~P3	5.74	18	3.14
P3~P4	4.96	22	4.43
P4周辺	4.33	17	3.92
計・平均	16.43	72	4.38

観察日 2020/6/16

コヨシキリ (*Acrocephalus bistrigiceps*) は、本州中部以北に渡来する夏鳥。オオヨシキリと同様に福島県RLの準絶滅危惧になっている。体長13.5cmとオオヨシキリより少し小さいが、概観はよく似ている。緑褐色で眉斑は白く、直ぐ上に黒褐色の線があり、良く目立つ。囀りは、高い声でケケシケケシピピピッカチと賑やかである。ヨシのある低地から高原の湿地や草原に生息する。オオヨシキリとヨシ原の棲み分けをしていると考えられる。観察箇所を地図上に記し、分布をみると、ヨシ原群落の周辺

部にコヨシキリがみられ、低い樹木でのさえずりを聞く。オオヨシキリとの生息域の重なりを避ける傾向がみられる。オオヨシキリとコヨシキリが共存できることは、生息に適した多様性のある環境地域が存在するといえ、環境変化が生息割合の変化に影響すると考えられる。コヨシキリの生息分布は昨年と比べ羽数が少なかったが大きな違いはなかった。ヨシ原の生育状況が分布に影響していると考えられる。環境省の繁殖分布調査では、県内での生息情報は少なく、猪苗代湖北岸はコヨシキリにとって貴重な生息地のひとつである。

オオヨシキリの生息密度を求めると、表 13 から P2~Pe 間 10.71 羽/ha、Pe~P3 間 3.14 羽/ha で、全体平均は 4.38 羽/ha で、昨年の平均 3.16 羽/ha より多くなっている。全体の生息数が増えたことによる。今年も、Pe~P3 間で生息密度が高くなった。小面積のヨシ原とヤナギ等の樹木が交互に連なる環境の所で、テリトリーを形成し易いので、多くなっていると推測される。またオオヨシキリは広く育ちの良いヨシ原を好むので、ヨシの生育状況も原因の一つと思われる。今後の保全に参考となることを望む。景観改善で烏帽子浜と三城潟でヨシ原の刈払いが 10 月に実施され、面積の減少となるので、次年度の春からの営巣への影響が懸念される。図 12,13 からヨシキリ類は同じような所を生息場所としていることが分かる。

表 14 R02 年 (2020) コヨシキリの生息密度

観察地点		面積 ha	生息羽数	密度羽/ha
白鳥浜から新田堀	P1~P2	1.80	0	0.00
白鳥浜から小黒川	P2~Pe	1.40	2	1.43
小黒川から烏帽子浜	Pe~P3	5.33	2	0.38
烏帽子浜から三城潟	P3~P4	4.71	1	0.21
三城潟	P4~P5	4.01	0	0.00
観察日6/16	計	17.25	5	0.29

図 12 H31 Pe~P3 オオヨシキリ コヨシキリ ヒバリの分布 (2019/6/14)

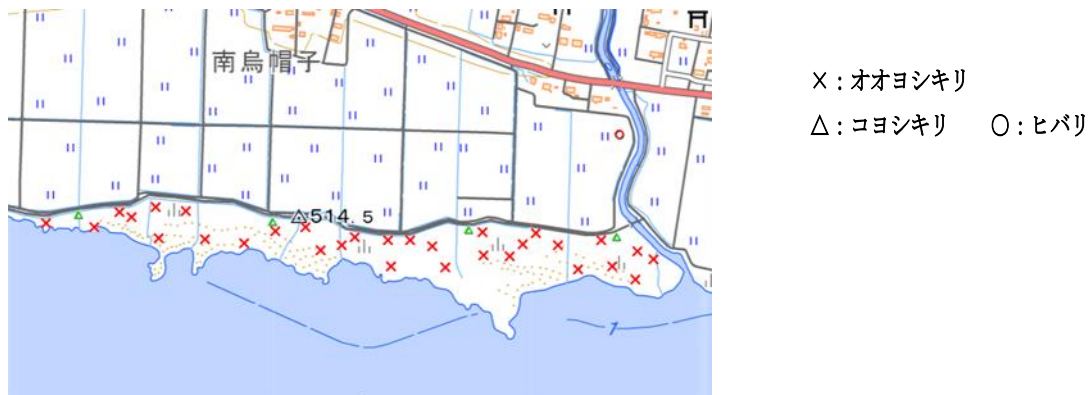


図 13 2020 Pe~P3 オオヨシキリ コヨシキリ ヒバリの分布 (2020/6/16)



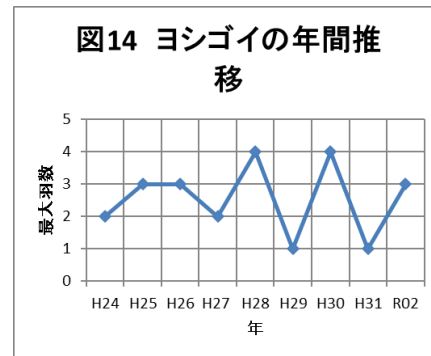


### 3.4 ヨシゴイについて

ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* は、夏鳥として本州の水田やヨシ原に渡来し、繁殖する。水辺で魚・カエル・昆虫を餌とする。体長 36cm で日本のサギ科の中では最小。体は黄褐色で、飛ぶと風切が黒く、雨覆いは黄褐色。メスは下面に不明瞭の褐色縦斑がある。静かな声でオーオーと鳴く。人が近づくと嘴と首を真っすぐに伸ばし、じっと動かないので見つけ難い。ヨシの葉で皿型の巣を作るなど、ヨシ原と関わりの深い鳥類のひとつである。北岸の調査地点の H31 は P2 で、R02 年は P1,P2,P3 でヨシゴイが観察されている。H31 年は減少したが変動が今年は回復し、県の絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。全国的にもコサギやアマサギの姿が少なくなっているため、これらのことと北岸のヨシ原の生息環境を含めて見て行くことが大切だろう。いつも猪苗代湖北岸で観察されるためには、まずヨシの生息環境がまだ良好に残っていること大切だろう。



写真 21 ヨシゴイ P2



### 3.5 ヒバリの分布について

夏鳥のヒバリが P2 から P5 地点で観察されている。今年は H31 の 3 羽から 7 羽に増加した。この地域の大部分は、畑地で、一部水田の畦で観察された。図 13 に一部の観察点を記した。これらの地域は、Pe で 0.14 羽/ha、P3 で 0.06 羽/ha、P3 で 0.05 羽/ha の密度で、これはソバや豆を栽培していた草地や畑地の面積割合が 2.0%、3.4%、2.1%だが、水田以外の利用地が 20%程度あり、このような環境を好む可能性もある。畑地で 1~2 羽/ha の縄張り面積の古い報告もある。猪苗代湖北岸のヒバリは、農耕地を巧みに利用し、毎年繁殖している。例年同じ様な処で繁殖活動を行っている。この地域では生息環境が安定的であるといえる。しかし 9 年間の推移からは、数が減少から回復傾向にあり、畑地や草地の宅地化などの開発で、全国的に生息数が減少し、準絶滅危惧に選定されている。北岸地域は、水田が減少しそば畑やその他の畑が増えている。生息環境としては広がっているが、生息数は増えていない。北岸の農耕地は、水田が少しずつ畑地に変わってきている。ヒバリは農耕地よりも草地を好むので、大きく増えない要因のひとつと推測される。秋に若鳥の囀りが観察され、春に戻る可能性もあり今後のヒバリの生息に注目したい。

### 3.6 カモ類等の生息環境

今回も昨年同様にカモ類の地点毎に羽数の多い種を見てゆくと、種類に違いが見られる。カルガモは全体で観察され、P2,Pe,P3,P4 で多い。ホシハジロの飛来が多く、昨年に引き続き全体で優占種となり、特に P1, Pe,P4 で多い。オオバンは本来冬鳥であったが、越冬地の猪苗代湖でも多く見かけ、優占種の一つとなり、夏でも見かけるようになった。温暖化の進行等による氷結しないことも理由の一つ挙げられる。基本的には草食で、潜水もする。マガモとコガモは P1,P2,Pe,P3 に多く、キンクロハジロも P3,P4 で多い。カワウは P1,P2,P5 に多い。オカヨシガモ、ハシビロガモは飛来が少なくなっている。地点毎のカモ類の生息状況は、優占種の順位変化があるが例年の調査結果と同様であった。今年はおオハクチョウの飛来が少なかった。

表 15-1,2 各地点毎のカモ類等の優占順位 R02 年 (2020)

カモ類の観察地点毎の優占種 2020年 繁殖期(4月～8月)																
No.	P1 種名・和名	%	P2 種名・和名	%	Pe 種名・和名	%	P3 種名・和名	%	P4 種名・和名	%	P5 種名・和名	%	P6 種名・和名	%	全体 種名・和名	%
1	カムリカイツリ	13.4	カルガモ	11.6	カルガモ	12.2	カルガモ	3.8	カルガモ	6.3	カワウ	30.8	コハクチョウ	16.2	カルガモ	9.0
2	カワウ	10.7	カイツリ	11.0	オオバン	9.7	カムリカイツリ	0.9	カイツリ	0.6	カルガモ	11.5	カルガモ	8.1	カワウ	5.3
3	カルガモ	8.0	オオバン	6.9	キンクロハジロ	8.9	コガモ	0.9	カムリカイツリ	0.6	キンクロハジロ	11.5	スズガモ	5.4	キンクロハジロ	4.4
4	キンクロハジロ	6.3	カワウ	5.2	カイツリ	6.4	カイツリ	0.4	コハクチョウ	0.6	カムリカイツリ	4.8	カワウ	1.4	カイツリ	4.1
5	カイツリ	4.5	カムリカイツリ	3.2	カワウ	3.0					オンドリ	2.9			オオバン	3.9
6			キンクロハジロ	1.7	カムリカイツリ	3.0					カイツリ	1.9			カムリカイツリ	3.5
7			スズガモ	1.2	バン	1.4									コハクチョウ	1.1
8			ヨシゴイ	0.6	ヨシゴイ	0.6									スズガモ	0.5
9			バン	0.6											バン	0.5
10															ヨシゴイ	0.3

カモ類の観察地点毎の優占種 2020年 越冬期(10月～12月)																
No.	P1 種名・和名	%	P2 種名・和名	%	Pe 種名・和名	%	P3 種名・和名	%	P4 種名・和名	%	P5 種名・和名	%	P6 種名・和名	%	全体 種名・和名	%
1	オオバン	34.8	オナガガモ	30.0	オナガガモ	43.0	カルガモ	14.6	ホシハジロ	36.9	コハクチョウ	36.8	カルガモ	71.5	ホシハジロ	25.5
2	ホシハジロ	34.7	キンクロハジロ	18.0	ホシハジロ	24.4	マガモ	7.6	キンクロハジロ	27.1	オオバン	22.4	スズガモ	15.8	オナガガモ	20.1
3	キンクロハジロ	11.0	コハクチョウ	8.8	コガモ	10.8	キンクロハジロ	3.8	オオバン	7.0	カルガモ	8.0	オオバン	5.9	オオバン	14.0
4	コハクチョウ	5.5	ホシハジロ	8.4	コハクチョウ	7.3	オオバン	3.8	オオバン	6.2	オナガガモ	8.0	ヒドリガモ	4.0	キンクロハジロ	9.3
5	マガモ	5.0	カワウ	7.0	マガモ	3.4	カワウ	3.2	マガモ	4.4	ハジロカイツリ	4.8	オナガガモ	0.8	コハクチョウ	6.3
6	カルガモ	3.2	コガモ	6.9	カルガモ	2.2	コガモ	3.2	コハクチョウ	1.7	ホシハジロ	1.6	ハクセキレイ	0.4	カルガモ	6.0
7	オナガガモ	2.6	カルガモ	5.2	カワウ	1.9	カイツリ	2.5	ヒドリガモ	1.2			コガモ	0.4	コガモ	4.5
8	カムリカイツリ	0.6	オオバン	5.1	オオバン	1.9	コハクチョウ	1.9	スズガモ	1.2			マガモ		マガモ	2.5
9	カイツリ	0.5	マガモ	3.6	マガモ	0.4	カムリカイツリ	1.3	カルガモ	0.4					マガモ	1.8
10	スズガモ	0.3	カムリカイツリ	1.5	オオハクチョウ	0.3									カワウ	1.6
11	カワウ	0.2	カイツリ	0.6	バン	0.2									ハジロカイツリ	0.2
12	ハジロカイツリ	0.1	ハジロカイツリ	0.3	カムリカイツリ	0.1									カムリカイツリ	0.2

P1とP2は、オナガガモ ホシハジロ キンクロハジロ マガモ コガモが優占種であり、他の種類も多い。カモ類の生態からみると、P1とP2は、水底採食型（ホシハジロ キンクロハジロ スズガモなど）と水面採食型（カルガモ マガモ）のカモが占め、種類も多いがカルガモは少なく、またマガモが見られることから、比較的 안전한 生息環境と推測される。PeからP4は、水面採食型のカモが、休息をしている姿が多い。P5,P6は岸よりにカルガモが濃い。北岸の水辺は、カモ類にとって、採食と休息の重要な地域となっている。水環境からカモ類の生息をみると、貧栄養環境では水面採食カモが優先し、富栄養環境で、水底採食カモが優先するとの報告もある。尚オオバンはカモ類ではないが、中から富栄養環境に生息する。全国調査結果からみると、湖沼河川の水質の改善が進み、ホシハジロ キンクロハジロは減少傾向にあると言われている。猪苗代湖北岸では、これらの羽数はほぼ安定的に推移しているが、今後、生息環境との関連等例えば沈水植物 抽水植物 浮葉植物を水鳥がどの様に利用しているのかという視点からも詳しい調査が期待される。

### 3.7 今後の予定

ヨシ原を利用する種の生息環境の変化について調査し、考えていきたい。当面はヨシの刈り取り時期や広さなどの判断の参考になれば良いと思われる。ツバメ、カワラヒワ、ムクドリ、スズメなどが、ヨシ原を罅として利用し、その記録が平成14年に報告されている。詳しい調査を、今後の課題としたい。身近な鳥として親しまれているツバメも近年の研究から、生息数が30年ほど前と比べ、半減しているとの報告がある。営巣場所や水田の減少などが原因に挙げられている。ヨシ原を罅として高度に利用しているので、保全が重要となっている。猪苗代湖北岸のヨシ原は、大規模なツバメの罅としての利用は観察されていないが、多くの飛来はある。農耕地、特に水田から畑地への変化があり、人との係わりが深い生息環境のヒバリなどもあるので、変化も見つめてゆきたい。越冬期の調査は観察が難しいので、実施数は少なく、いくつかの種類が観察から漏れている可能性があり、今後の課題である。猪苗代湖周辺は積雪があり草地等を生息環境としている種類には、厳しい環境となる。沈水性植物に依存するカモ類の保全のあり方は、カモ類の採餌行動の調査研究と沈水性植物の生育環境の管理方法などの具体的施策について、課題となろう。水環境保全活動の各施策実施により、自然環境が良くなり、希少種を含め、多くの野生生物の生息環境も保全される事を望む。多くの人が参加し取り組むことが出来るように、国際条約のラムサール条約(特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約)

への猪苗代湖の登録が水辺環境の保全に有効な方法になりうるので、将来的に大切と考える。条約の趣旨は、水鳥の生息地としてだけでなく、私たちの生活環境を支える重要な生態系として、幅広く湿地の保全・再生を図り、産業や地域の人々の生活とバランスのとれた保全を進めるために、湿地の生態系を維持しつつ、そこから得られる恵みを持続的に活用する。交流、教育、参加、普及啓発活動を進めて行くとなっている。多くの関係者ととも課題として取り組んでゆきたい。国連のSDGsも最近注目されるようになってきた。地球環境の視点から私たちの行動を考えていこうというもので、人々の生活と環境保全のバランスが一層求められる。今回の調査の結果から、生息数の漸減傾向の種もあるので、調査することと、保全のための具体的な施策や関係方面への情報の共有なども課題である。猪苗代湖の野生生物の鳥類を主に、種類や数を観察することにより自然に親しんできた。鳥類も、水質環境（汚染 有害物質）に生息が影響される。観察に洩れている種もあると思われるので、観察を継続し、多様性豊かな猪苗代湖の自然を見守ってゆきたい。

## 1. 謝辞

今回の調査に当たり、猪苗代湖・裏磐梯湖沼水環境保全対策推進協議会の「きらめく水のふるさと磐梯」湖美来基金の保全活動支援事業助成を一部受けました。関係各位に感謝申し上げます。更に、調査に携わった日本野鳥の会会津支部の皆さんのご協力と励ましに感謝申し上げます。協力を戴いた会員は次の各氏です。満田信也 児山章二 武田健 星野純 山岸千賀子 林克之

## 2. 注と参考資料

注・・・科名と種名は日本鳥類目録改訂7版（2012）日本鳥学会に拠る。

- ①「フィールドガイド日本の野鳥」 増補改訂新版 高野伸二著  
(財)日本野鳥の会発行 (2015年6月)
- ②「レッドデータブック ふくしまⅠ」 福島県編集・発行 (2003年3月)
- ③「猪苗代湖の自然と環境」 猪苗代湖の自然を守る会発行 (2008年4月)
- ④「磐梯山 四季のうつろい」 斉藤・本多・富田著 歴史春秋出版社 (2003年9月)
- ⑤「ふくしまの野鳥」第50回全国野鳥保護のつどい記念誌福島県森林整備課 ('96年5月)
- ⑥「同所性オオヨシキリとコヨシキリの種間関係」 T.Kagawa 日鳥学誌 37:129-144,(1989)
- ⑦「ヒバリの生活史に関する研究」 K.haneda 山階鳥研報 5, No.1 72-84 (1967)
- ⑧「日本の鳥の世界」 樋口広芳著 2014 平凡社 東京
- ⑨「月日星 会津の鳥類目録」 日本野鳥の会会津支部 (2015年5月)
- ⑩ T.shimada,A,mori,H,higuchi “Trend in the abundance of diving ducks and seaducks wintering in Japan” Wildfowl(2016)66,176-185
- ⑪「福島県鳥類総目録」福島県日本野鳥の会連携団体連合会 編集・発行 2016年5月
- ⑫ラムサール条約については、環境省のHP
- ⑬M.kitazawa,Y.yamaura,et al. Ornithol Sci 18:3-16(2019)  
“An evaluation of five agricultural habitat types for openland birds : ”
- ⑭ 全国鳥類繁殖分布調査 2016-2019 日本の鳥の今を描こう Bird-atlas.jp
- ⑮ T.Watanabe Strix vol.34, pp119-127,2018  
“Birds using a community of Nymphoides peltate in Lake Kasumigaura”
- ⑯全国繁殖分布調査概要 2016-2020 環境省HP

表 16 調査出現鳥類の学名

2011年～2020年 精苗代湖北岸確認種				(日本鳥類目録改訂7版(D7)による)			
No.	ID7	和名	科	区分	学名	環境省RL	福島県RL
1	587	カワラヒワ	アトリ	留鳥	<i>Chloris sinica minor</i>		
2	463	ヒヨドリ	ヒヨドリ	留鳥	<i>Hypspetes amaurotis amaurotis</i>		
3	610	ホオジロ	ホオジロ	留鳥	<i>Emberiza cioides ciopsis</i>		
4	342	トビ	タカ	留鳥	<i>Milvus migrant lineatus</i>		
5	358	ノスリ	タカ	留鳥	<i>Buteo buteo japonicus</i>		
6	569	スズメ	スズメ	留鳥	<i>Passer montanus saturatus</i>		
7	420	モズ	モズ	留鳥	<i>Lanius bucephalus bucephalus</i>		
8	445	シジュウカラ	シジュウカラ	留鳥	<i>Parus minor minor</i>		
9	466	エナガ	エナガ	留鳥	<i>Aegithalos caudatus trivirgatus</i>		
10	506	ムクドリ	ムクドリ	留鳥	<i>Spodiopsar cinereus</i>		
11	485	メジロ	メジロ	留鳥	<i>Zosterops japonicus japonicus</i>		
12	390	コゲラ	キツツキ	留鳥	<i>Dendrocoops kizuki nippon</i>		
13	397	アオゲラ	キツツキ	留鳥	<i>Picus awokera awokera</i>		
14	393	アカゲラ	キツツキ	留鳥	<i>Dendrocoops major hondoensis</i>		
15	464	ウグイス	ウグイス	留鳥	<i>Cettia diphone cantans</i>		
16	540	ジョウビタキ	ツグミ	冬鳥	<i>Phoenicurus aureus aureus</i>		
17	525	ツグミ	ツグミ	冬鳥	<i>Turdus naumanni eunomus</i>		
18	617	カンラダカ	ホオジロ	冬鳥	<i>Emberiza rustica latifascia</i>		
19	586	アトリ	アトリ	冬鳥	<i>Fringilla montifringilla</i>		
20	353	カワセミ	カワセミ	留鳥	<i>Alcedo atthis bengalensis</i>		
21	146	ダイサギ	サギ	留鳥	<i>Ardea alba modesta</i>		
22	144	アオサギ	サギ	留鳥	<i>Ardea cinerea joiyi</i>		
23	148	コサギ	サギ	留鳥	<i>Egretta garzetta garzetta</i>		準絶滅危惧
24	139	コイサギ	サギ	留鳥	<i>Nycticorax nycticorax nycticorax</i>		
25	574	ハウセキレイ	セキレイ	留鳥	<i>Motacilla alba lugens</i>		
26	575	セグロセキレイ	セキレイ	留鳥	<i>Motacilla grandis sharpe</i>		
27	573	キセキレイ	セキレイ	留鳥	<i>Motacilla cinerea cinerea</i>		
28	127	カワウ	ウ	留鳥	<i>Phalacrocorax carbo hanadae</i>		
29	435	ハシボソガラス	カラス	留鳥	<i>Corvus corone orientalis</i>		
30	436	ハシトガラス	カラス	留鳥	<i>Corvus macrorhynchos japonensis</i>		
31	457	ツバメ	ツバメ	夏鳥	<i>Hirundo rustica gutturalis</i>		
32	461	アツツバメ	ツバメ	夏鳥	<i>Delichon dasypus dasypus</i>		
33	192	アマツバメ	アマツバメ	夏鳥	<i>Apus pacificus kurodae</i>		
34	506	ムクドリ	ムクドリ	夏鳥	<i>Agropsar philippensis</i>		
35	147	チュウサギ	サギ	夏鳥	<i>Egretta intermedia intermedia</i>	NT	
36	133	ヨシゴイ	サギ	夏鳥	<i>Ixobrychus sinensis sinensis</i>	NT	
37	314	アジサシ	カモメ	旅鳥	<i>Sterna hirundo longipennis</i>		
38	261	ハマシギ	シギ	旅鳥・冬鳥	<i>Calidris alpina</i>		準絶滅危惧
39	239	クサシギ	シギ	旅鳥・冬鳥	<i>Tringa ochropus</i>		
40	552	エゾビタキ	ヒタキ	旅鳥	<i>Muscicapa griseisticta</i>		
41	74	キジバト	ハト	留鳥	<i>Streptopelia orientalis orientalis</i>		
42	32	カルガモ	カモ	留鳥	<i>Anas zonorhyncha</i>		
43	62	カイツブリ	カイツブリ	留鳥	<i>Tachybaptus ruficollis poggei</i>		
44	24	オンドリ	カモ	留鳥	<i>Aix galericulata</i>	DD	準絶滅危惧
45	64	カンムリカイツブリ	カイツブリ	冬鳥	<i>Podiceps cristatus cristatus</i>		
46	66	ハジロカイツブリ	カイツブリ	冬鳥	<i>Podiceps nigricollis nigricollis</i>		
47	26	オナガガモ	カモ	冬鳥	<i>Anas strepera strepera</i>		
48	42	ホシハジロ	カモ	冬鳥	<i>Aythya ferina</i>		
49	28	ヒドリガモ	カモ	冬鳥	<i>Anas penelope</i>		
50	47	スズガモ	カモ	冬鳥	<i>Aythya marila marila</i>		
51	46	キンクロハジロ	カモ	冬鳥	<i>Aythya fuligula</i>		
52	38	コガモ	カモ	冬鳥	<i>Anas crecca crecca</i>		
53	30	マガモ	カモ	冬鳥	<i>Anas platyrhynchos platyrhynchos</i>		
54	34	ハシビロガモ	カモ	冬鳥	<i>Anas clypeata</i>		
55	35	オナガガモ	カモ	冬鳥	<i>Anas acuta</i>		
56	57	ホオジロガモ	カモ	冬鳥	<i>Bucephala clangula clangula</i>		
57	59	カワアイサ	カモ	冬鳥	<i>Mergus merganser merganser</i>		
58	58	ミコアイサ	カモ	冬鳥	<i>Merrellus albellus</i>		
59	19	コハクチョウ	カモ	冬鳥	<i>Cygnus columbianus jankowskyi</i>		
60	20	オオハクチョウ	カモ	冬鳥	<i>Cygnus cygnus</i>		
61	175	オオバン	クイナ	冬鳥	<i>Fulica atra atra</i>		
62	8	ヒシクイ	カモ	冬鳥	<i>Anser fabalis serrirostris</i>	VU	準絶滅危惧
63	10	マガン	カモ	冬鳥	<i>Anser albifrons</i>	NT	準絶滅危惧
64	293	ウミネコ	カモメ	冬鳥・漂鳥	<i>Larus crassirostris</i>		
65	174	バン	クイナ	漂鳥・夏鳥	<i>Gallinula chloropus chloropus</i>		準絶滅危惧
66	452	ヒバリ	ヒバリ	夏鳥	<i>Alauda arvensis japonica</i>		準絶滅危惧
67	499	セツカ	ウグイス	夏鳥	<i>Cisticola juncidis</i>		準絶滅危惧
68	624	アオジ	ホオジロ	夏鳥	<i>Emberiza spondocephala personata</i>		
69	602	イカル	アトリ	留鳥	<i>Eophona personata personata</i>		
70	355	ハイタカ	タカ	留鳥	<i>Accipiter nisus nisosimilis</i>	NT	絶滅危惧Ⅱ類
71	356	オオタカ	タカ	留鳥	<i>Accipiter gentilis fuyijamae</i>	NT	絶滅危惧Ⅱ類
72	354	タカ	タカ	留鳥	<i>Accipiter gentilis gentilis</i>		準絶滅危惧
73	407	ハヤブサ	ハヤブサ	留鳥	<i>Falco peregrinus japonensis</i>	VU	準絶滅危惧Ⅱ類
74	357	サシバ	タカ	留鳥	<i>Butastur indicus</i>	VU	準絶滅危惧
75	628	オオジュリン	ホオジロ	夏鳥	<i>Emberiza schoeniclus pyrrhulina</i>		
76	492	オオシキリ	ヨシキリ	夏鳥	<i>Acrocephalus orientalis</i>		準絶滅危惧
77	493	ヨシキリ	ヨシキリ	夏鳥	<i>Acrocephalus bistrigiceps</i>		準絶滅危惧
78	203	コチドリ	チドリ	夏鳥	<i>Charadrius dubius curonicus</i>		
79	600	シメ	アトリ	冬鳥	<i>Coccothraustes coccothraustes japonicus</i>		
80	592	ベニマシコ	アトリ	冬鳥	<i>Uragus sibiricus</i>		
81	286	ユリカモメ	カモメ	冬鳥	<i>Larus ridibundus</i>		
82	194	タゲリ	チドリ	冬鳥	<i>Vanellus vanellus</i>		
83	588	マヒワ	アトリ	冬鳥	<i>Carduelis spinus</i>		
84	27	ヨシガモ	カモ	冬鳥	<i>Anas falcata</i>		
85	434	ヤマガラス	カラス	冬鳥	<i>Corvus frugilegus</i>		
86	202	イカルチドリ	チドリ	留鳥・漂鳥	<i>Charadrius placidus</i>		
87	580	ビンスイ	セキレイ	留鳥	<i>Anthus hodgsoni hodgsoni</i>		
88	443	ヒガラ	シジュウカラ	留鳥	<i>Periparus ater insularis</i>		
89	442	ヤマガラ	シジュウカラ	留鳥	<i>Poecile varius</i>		
90	503	キバシリ	キバシリ	留鳥	<i>Certhia familiaris</i>		準絶滅危惧
91	427	カケス	カラス	留鳥	<i>Garrulus glandarius japonicus</i>		
92	166	クイナ	クイナ	留鳥	<i>Rallus aquaticus indicus</i>		準絶滅危惧Ⅱ類
93	195	ケリ	チドリ	留鳥	<i>Vanellus cinereus</i>	DD	絶滅危惧ⅠB類
94	401	チョウゲンボウ	ハヤブサ	留鳥	<i>Falco tinnunculus</i>		準絶滅危惧
95	B21	ガビチョウ	ハヤブサ	留鳥	<i>Garrulax canorus</i>	特定外来種	
96	244	イソシギ	シギ	夏鳥	<i>Actitis hypoleucos</i>		
97	188	カッコウ	カッコウ	夏鳥	<i>Cuculus canorus</i>		準絶滅危惧
98	480	エンダイムシクイ	ムシクイ	夏鳥	<i>Phylloscopus coronatus</i>		
99	479	エンムシクイ	ムシクイ	夏鳥	<i>Phylloscopus borealoides</i>		
100	554	コサメビタキ	ヒタキ	夏鳥	<i>Muscicapa dauurica</i>		準絶滅危惧
101	542	ビタキ	ヒタキ	夏鳥	<i>Saxicola torquatus stejnegeri</i>		
102	412	サンショウクイ	サンショウクイ	夏鳥	<i>Percroctus divaricatus</i>	VU	準絶滅危惧
103	558	キタキ	ヒタキ	夏鳥	<i>Ficedula narcissina</i>		
104	185	ホトトギス	カッコウ	夏鳥	<i>Cuculus poliocephalus</i>		
105	501	ヒレンジャク	レンジャク	冬鳥	<i>Bombicilla japonica</i>		
106	339	ミサゴ	ミサゴ	留鳥	<i>Pandion haliaetus</i>	NT	準絶滅危惧
107	5	キジ	キジ	留鳥	<i>Phasianus colchicus</i>		
108	419	チコモズ	モズ	留鳥	<i>Lanius tigrinus</i>	CR	絶滅危惧ⅠA類
109	404	チヨハヤブサ	ハヤブサ	夏鳥	<i>Falco subbuteo</i>		絶滅危惧Ⅱ類
110	568	ニュウナイスズメ	スズメ	留鳥	<i>Passer rutilans</i>		

猪苗代湖北岸の鳥類調査報告 2020年

発行 2021年2月28日

著作 日本野鳥の会 会津支部  
代表 満田信也

連絡先 事務局 福島県会津若松市宝町2  
Tel&Fax 0242-28-9713

本報告の無断複写を禁じます。